

〈研究ノート〉

相対的剥奪論 再訪 (三)*

高 坂 健 次**

1 問題の所在

前稿において、「相対的剥奪」概念が集団的特性に関わるということをも *The American Soldier* というこの理論に関する開拓的業績を振り返るなかで強調した(高坂, 2009, 2010)。まず、「研究ノート(一)」では、*The American Soldier* で報告されているデータのなかから兵士の昇進機会と逆比例していることをグラフで示した。「研究ノート(二)」では、Stouffer たちが、「相対的剥奪」が個人に決定論的に(というコトバは使っていないが)適用できるのではなく、個人人の反応を或る集団について「平均して」みたときに適用できる概念であることを慎重に強調していたことを述べた。

相対的剥奪概念が社会学にとってとりわけ興味があるのは、現象の「意外性」である。Stouffer たちのコトバで言えば、「一見パラドックスに見える」ところにある。すなわち、たとえば、昇進機会が大きな集団ほど、それに対する評価が否定的である、つまりは不満の占める割合が大きい、というのは私たちの「常識」からすれば「意外」であり「パラドックス」に見える。なぜ、恵まれている集団のほうが「平均して」言えば、成員の評価が低いのか。

こうした現象は、むしろ Stouffer たちがはじめて「発見」したわけではないだろう。だからこそ、いつも相対的剥奪論の話が出るたびに、枕にはトックビルやデュルケーム、ソローキンらのさらなる先駆的業績が言及される。しかし、

Stouffer たちは、この現象に「相対的剥奪」という概念を明示的に与えたことで、単なる「発見」を超えて、ほとんど「発明」と呼んでもよい科学的革新の役割を担ったのである。すなわち、意味のある概念の創出は、創出されたその時点から今度は「索出的」役割を担うことになるからである。じじつ、そうだった。

ここまでの話にはとくに新味はない。しかしながら、「意外性」や「パラドックス性」を私たちの研究者としての、あるいは私人としての「常識」を参照基準として理解しているかぎりにはじつは早計と言わざるをえない。なぜならば、もしも諸個人の一人ひとりが、仮に「昇進」を嫌がる傾向があったとしたらこの集合的特性は何も「意外」でもなければ「パラドックス」でもなくなるからである。むしろ、個人が「昇進」を嫌がるということは考えにくいと言えば言えるけれども、経験的には十分にありうることである。「昇進」をいさぎよしとしない現象は日常的にも見られるように思うし、一般企業や官庁においても最近ではストレスの多い「中間管理職」を嫌がって、「昇進」を敬遠する人々もあるやに聞くし、すでに管理職に就いていた人々が「降格」を申し出る人もあるやに聞く。事実の真偽についてはそちらの専門家に委ねなければいけないけれども、私たちのイメージをを広げるだけでもそれらは十分にありうることに思われる。

もし、個人がそのようだとすれば、個人人の反応(意見や態度)を集計した結果が、「昇進(率)」と「満足(率)」とが逆比例の関係にあったとしても、このばあいには、意外でもパラドック

*キーワード：相対的剥奪、『アメリカ軍兵士』、個人的特性、集団的特性

本研究の一部は、科学研究費基盤研究(B)(課題番号：20330224)の援助を受けてなされたものである。

**関西学院大学社会学部教授

スでもなく、むしろ「当然の帰結」ということになるだろう。この点は、単純なことのようだけれども、重要である。

私たちは、自分たちの「常識」だけを頼りに「相対的剥奪」論を面白がってはいけないのである。相対的剥奪現象が集団的特性であるという結論そのものはそのとおりだが、それが社会的にみて面白いのは私たちの「常識」に反するからだと考えるのは早計である。集団的特性が面白いのは、同時に個人的特性について着目し、両者の間にパラドックスが存在していることを確認しておく必要があるように思われる。本稿においては、くどいようだが、その点について述べたい。

2 個人的特性

2.1 データの質

まず、*The American Soldier* において報告されているデータの個人的特性について確認しておきたい。すでに述べたように、*The American Soldier* がとりあげているトピックとデータの種類は多岐に亘っているので、ここでは「相対的剥奪」論との関連で最も関心と呼び、かつ重要と思われる CHART IX (Stouffer et al., 1949, p. 252)、すなわち昇進事実 (=NONCOMS に昇進することができたかどうか) と昇進機会に対する評価 (=満足か不満か) との関連をめぐって、確認しておきたい。CHART IX の再掲とそこに盛り込まれたデータの再構成についてはすでに前々稿において行っている (高坂, 2009)、ここでは紙幅の制約上繰り返すことはしない。しかし、CHART IX が何を示していたかについては最低限述べておかねばなるまい。

それは「能力のある兵士は軍隊での昇進機会が大きいとあなたは思いますか」という設問に対して、兵士がどのように答えていたかを図表で示したものであった。兵士は、憲兵隊と航空隊とに大きく分けられ、それぞれは低学歴と高学歴に分けられている。また、調査時点での地位に応じて、NONCOMS と PVT'S/PFC's とに分けて回答が示されている。図表の要点は、(昇進率の高い) 航空隊の兵士のほうが対応する学歴グループ/地位の憲兵隊兵士よりも「満足率」が低い、という点

にあった。これまで筆者が「集団的特性」と呼んできたのはその要点を指してのことであった。

では、CHART IX に見られる「個人的特性」とは何か。以下においては、議論上の無用の混乱を避けるために、調査時点で NONCOMS に分類されていた兵士を、「昇進した」兵士として扱い、その時点で PVT'S/PFC's として分類されていた兵士を、「昇進しなかった (=昇進せず)」兵士として扱う。さらに、「能力のある兵士は軍隊での昇進機会が大きいとあなたは思いますか」という設問に対して、「昇進機会が大きい」と答えた兵士を「満足」している兵士、その他の回答 («昇進機会はありません」「まったくない」「どちらとも言えない») を「不満」をもっている兵士として扱う。このように割り切って扱うことについては、くどいようだが若干の注釈がやはりここでも必要である。

まず、調査時点で PVT'S/PFC's として分類されていた兵士を「昇進しなかった (=昇進せず)」兵士として扱う、とした。しかし「昇進しなかった」というニュアンスはまちまちでありうる。そのニュアンスによって、事実についての読者ないし解釈者の解釈も左右されかねないのでその取扱には慎重でなければならない。「昇進しなかった」というぶっきらぼうな「事実」の背後には「流れ」というものがあるだろう。「(努力の上で、時間の上で) もうちょっとすれば、昇進できる」可能性を秘めてはいるが、調査時点では (残念ながら) 「昇進しなかった」という場合もありうるだろうし、「(まったく箸にも棒にもかからず昇進の見込みは未来永劫ありえない状態なので) 「昇進しなかった」という場合もありうるだろう。後者の場合は、本人は昇進を望んでいたかもしれないが、むしろ「昇進できなかった」と表現するのがあっている。

こうした「流れ」に着目してニュアンスの違いのありうることをいちおう念頭に入れておくということであれば、似たようなことは NONCOMS についても言える。NONCOMS に「昇進した」けれども、近い将来さらに「士官に昇進する勢い」のある兵士もあれば、将来に亘って NONCOMS 止まりだろうけれども調査時点では NONCOMS に成れた、という兵士もいるかもし

れない。

こうした「流れ」や「勢い」のあることを承知でなお「事実」を二つに分類することにはむろん限界があるが、データ蒐集と質の保持の観点からして研究者に手っ取り早く出来ることと言えば、調査対象である兵士たちの従軍期間 (longevity) を一定に保つことである。すでに前々稿で言及しておいたように、調査対象者はいずれも「徴兵後 1, 2 年」に統一されている。1 年でもなく、2 年でもなく、「1, 2 年」となっているところが「気持ちが悪い」と受け取る向きもあるかもしれないが、その点は措く。Stouffer たちは、CHART IX については調査対象者の「従軍期間」を一定に保つことで、こうした「流れ」や「勢い」からくるニュアンスの差異を理論的に (言えば、確率論的に) 「帳消しにした」と見ることが出来る。

要するに、こうしたデータの選択と扱いによって、昇進そのものにまつわる事実とは二つしかないことになる。「昇進した」か「昇進せず」のいずれかである。二分法である。その中間も存在しないし、その両方も存在しない。カテゴリーや分類の論理的性質についての専門用語で言えば、この二分法は mutually exclusive (相互排他的) であり、かつ exhaustive (網羅的) である。そして、二分法は「満足」と「不満」という形での意見ないし評価についてもあてはまる。否、元の CHART IX を見れば、「回答」のほうは棒グラフの上から

“A very good chance”

“A fairly good chance”

Undecided

“Not much of a chance” or “No chance at all”

というふうに 4 つに分類されているので、「二分法」とは言えない。したがって、これを順序尺度と見なすことも出来る (Undecided の位置づけについては、異論のあるところであろうが)。しかし、昇進という事実が当の兵士に満足をもたらすものかどうかという論点からすれば、これを思い切って二分法カテゴリー (名目尺度) として扱うことにも理があるだろう。

すぐ上では、これらの回答選択肢のうち “A very good chance” (=「昇進機会が大きい」) と

答えたものを「満足」、それ以外を「不満」として扱う、と仮に述べた。しかし同じく二分法をとるとしても、この処理の仕方について異論の出ることは理解できる。したがって前々稿においても二通りの「満足」/「不満」の分類の仕方をしてみた。一つは、今しがた述べたように、“A very good chance” と答えたもののみを「満足」として処理をし、他の回答選択肢を選んだものをすべて「不満」として処理するやりかたである。このやり方による「満足」を前々稿に合わせて「満足」①と仮にしておこう。(ただし、前々稿は「満足率」を問題にしていたので、「満足率」①。) もう一つは “A very good chance” と “A fairly good chance” を合わせたものを「満足」として処理するやりかたである。残りの回答を合算して「不満」とするやり方である。ここでも Undecided の扱いに困る。そもそもそれを除外して統計処理をするという考え方もあろうけれども、割合もさほど多くないことに鑑みれば (それでも最高は、高学歴の MP の場合で、12%もある)、わざわざ除外しなくてもよいかもしれない。少なくとも「積極的満足」とは言えまいということ根拠に考えれば、それを「不満」のなかに入れて処理しても理にかなうであろう。後者のやり方で得られた「満足」を便宜上「満足」②、「不満」②としておこう。

すこし遠回りをしたが、これで意見ないし評価のほうも二分法、つまり 2 値としての扱いを可能にする。「可能にする」という言い方は消極的に響くけれども、「相対的剥奪」論にとっては、意見ないし評価の変数についても二分法のほうが問題の性質を明確化するうえでむしろ良いと考える。

以上で、個人的特性を示すデータの質について明らかにすることができた。CHART IX とそれを取り扱っているデータについて言うならば、端的に言って 2×2 のクロス表にまとめることができる。CHART IX は 4 つの集団 (低学歴の MP、高学歴の MP、低学歴の AC、高学歴の AC) に分けられているので、ここでいう 2×2 のクロス表とは、それぞれの集団に対応したクロス表である。

2×2 のクロス表に行く前に、まずは元のデータの素朴な再提示をしておこう。図 1 は 4 つの集

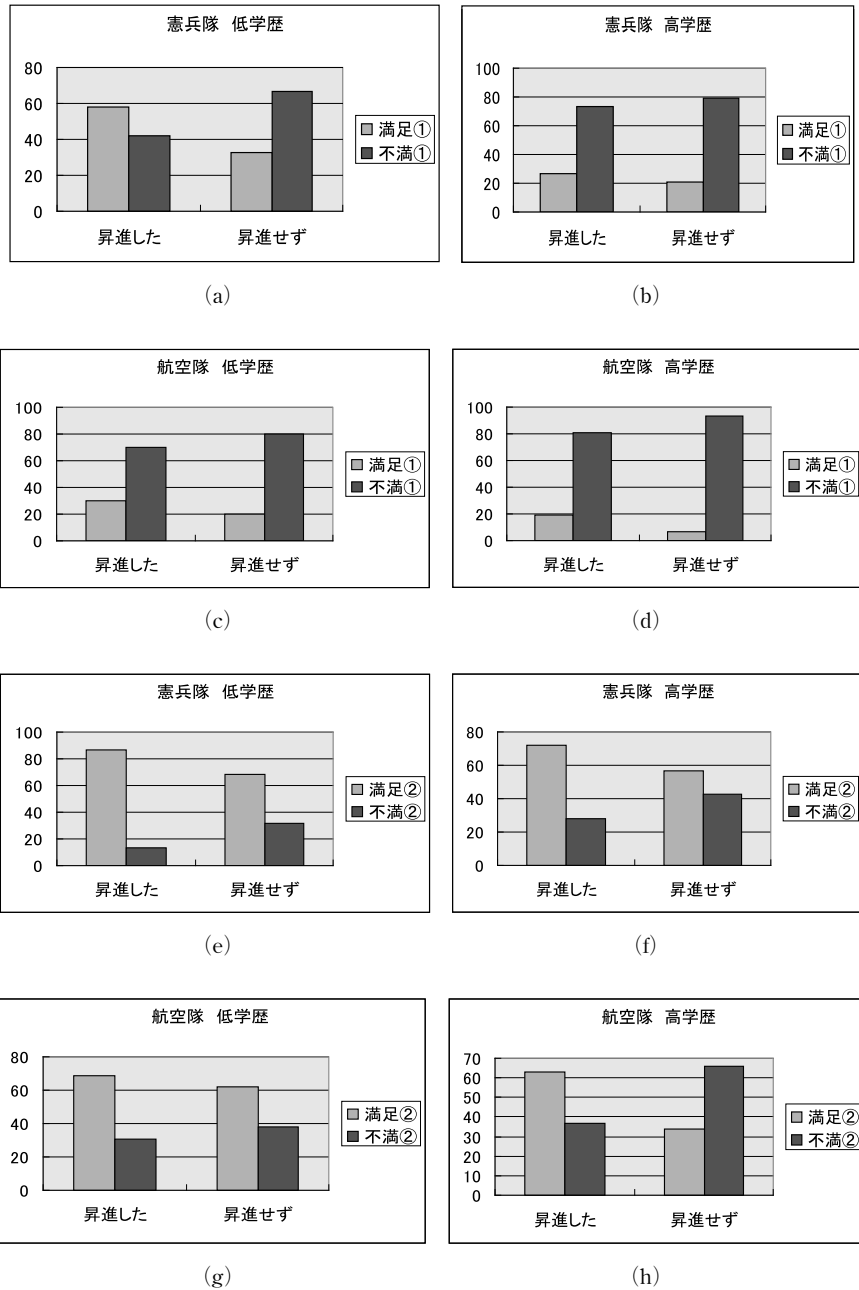


図1 昇進事実と満足/不満 (%)

団のそれぞれにおいて、「昇進した」グループすなわち NONCOMS と、「昇進せず」のグループすなわち PVTs/PFTs のそれぞれの「満足」/「不満」の割合を単純な棒グラフで示したものである。

2.2 データの分析

(a)~(d)のなかで、「満足」が「不満」を上回っている、すなわち「満足」の割合が5割を超えているのは、「憲兵隊の低学歴」集団だけである。言い換えれば、「憲兵隊の低学歴」で NONCOMS まで「昇進した」兵士の間での「満

足」の割合は、5割を超えているだけでなく、他の集団に比べてもきわめて「満足」の割合が高いことが窺える。

(a)～(d)に比べて、(e)～(h)のほうが「満足」の割合が高いのはいわば操作的定義上当然の結果である。そのことを差し引いて図を眺めてみると、今しがた述べたこと、すなわち4つの集団のうち「憲兵隊の低学歴」だけが5割以上の「満足」を示しているのと真逆の関係が窺える。すなわち、「航空隊の高学歴」だけが5割以上の「不満」を示していることが窺える。

直感的に言えば、憲兵隊の低学歴の場合はあまり昇進を期待できないところへもって「昇進した」わけなので「満足」を感じている兵士が多く、逆に航空隊の高学歴は昇進して当然とさえ思えるところへもって「昇進せず」なので「不満」を感じている兵士が多くなっている、と解釈できる。

8つのグラフの全体を通して、最も顕著な特徴と言えば、「昇進した」方が「昇進せず」よりも「満足」の割合が大きい、という点だ。「満足」と「不満」の差が顕著かそうでないかについては、多少の違いはあるものの、この特徴は8つのグラフのすべてに例外なくあてはまるのである。

図1のグラフは比率の違いだけを（ここでは視覚に訴えるかたちで）問題にしている。しかし比率の比較を示すグラフはしばしば人を誤解に招くし、データの解釈やそれに基づく施策を誤ってしまうこともある。それは、母集団の数がきわめて大きいときには、或る属性をもっている人々の比率が仮に「そこそこ」だったとしても、彼らの実数は巨大な数に及ぶのに似ている。

実数のことを勘案したうえで、しかも「昇進」をめぐる事実と「満足」／「不満」との関連性を確かめるにはどうすればよいか。統計調査の基礎的知識があれば、ここで4つの集団それぞれについて、あるいはその全体について、 2×2 のクロス表を構築し、二つの名目変数間の「独立性」について χ^2 乗検定を試みるであろう。

因みに、「憲兵隊の低学歴」について見ると、表1(a)(b)のようになる。(a)は「満足」①に、

(b)は「満足」②のそれぞれ操作的定義に対応している。

表1 昇進事実×満足／不満（実数）：憲兵隊の低学歴の場合

	昇進した	昇進せず	合計
満足①	96	233	329
不満①	69	474	543
合計	165	707	872

(a)

	昇進した	昇進せず	合計
満足②	144	480	624
不満②	21	227	248
合計	165	707	872

(b)

計算の結果は、いずれも $p < 0.000$ となり、二つの変数は互いに独立ではなく、統計的に有意の関係があるという結論を得る。参考までに、4つの集団すべてについて、「独立性」検定を行った結果をまとめて表2に掲げておく¹⁾。いずれも自由度は1である。

この結果を見ると、大まかにはどの集団を取り上げてみても二つの変数の間には「関連がある」、すなわち（図1を併せ見ることによって）「昇進した」事実があれば「満足」する傾向がある、と。もっと端的に言えば、昇進すれば満足するが、昇進しなければ不満である（傾向がある）。ちなみに、4つの集団すべてを集計して同様の 2×2 のクロス表を作って、独立性検定を行っても p 値は0.000以下である。ただし、 p 値から見て分かるとおり、「航空隊の低学歴」集団の(b)については、有意水準の設け方にも拠るが、二つの変数が関連あるとは言えない。有意水準をどこに設けるかによって判断が異なってくるのは、同集団の(a)についても言える。こうしたデータが与えられたとき、「航空隊の低学歴」集団には何か特別の原因や理由が作用してこうなっているのかどうか気がなるところであるが、ここではそれ以上の推論根拠は原書を見るかぎり分からない。二つの変数の間には「関連がある」と

1) 独立性検定の計算にあたっては、前田豊氏がExcel上に作成したプログラム・ワークシートを利用させてもらった。

表2 昇進事実×満足／不満の独立性検定の結果²⁾

	憲/低(a)	憲/低(b)	憲/高(a)	憲/高(b)	航/低(a)	航/低(b)	航/高(a)	航/高(b)
χ^2 値	36.233	24.689	3.133	15.604	1.889	0.7000	7.898	22.889
p 値	0.000	0.000	0.076	0.000	0.169	0.403	0.005	0.000

いう傾向性を根底から覆すほどの理由は見当たらない。

以上のように、図1と表2から、経験的にみて「昇進すれば、満足する」傾向のあることが窺える。これがここでいう「個人的特性」である。だからこそ、「集団的特性」としては「昇進率が高いほど、不満の割合が高くなる」のが「パラドクシカルに見え」るし、「意外」なのである。つまり、ここでは個人的特性と集団的特性とが真逆になっているのである。したがって、集団的特性のみを経験的に観察して、それ自体が私たちの「常識」に反しているのが「パラドクシカルに見え」るし「意外」だというのは早計で、結論としては同じようなものだけれども、こうして個人的特性を（統計的手法なり何なりによって）経験的に確認しておくことが「相対的剥奪」概念の重要性とその理論の「面白さ」を保証していると考えべきである。くどいようだが、何らかの事由で、個人々が「昇進すれば、不満を覚える」ような状況が存在したときには、「集団的特性」は別に不思議でも意外でもパラドクスでもないのである。

簡単な結論にたどり着くのに、ずいぶんと遠回りをした。「相対的剥奪」概念が重要で面白いのは、個人的特性と集団的特性とが真逆の性質を経験的にもっているからである³⁾。

ここで「個人的特性」と呼ぶとき、注意しておかなければならないことがある。それは、上の個人的特性の分析の過程で十分に明らかになっていることに関わる。個人的特性として「昇進すれば、満足する」、逆に表現すれば、「昇進できなければ、不満を覚える」といっても、これはそうした傾向があるという意味であって、関連する全成員がそうだというわけではない。すなわち、たとえば表1(b)を見れば分かる通り、昇進したのにもかかわらず不満に思っている兵士は、165人中21人(12.7%)は居るし、昇進できなかったのに満足している兵士は、707人中じつに480人(67.9%)も居るのである。彼らは決して「例外」というわけではない。 χ^2 二乗による「独立性」検定の考え方は、「昇進—満足」ならびに「非昇進—不満」に分類されるセルの兵士たちの数(=観測値)が、「統計的独立性」を仮定したときの期待値よりも上回るという一点に着目しているだけである。「個人(的的特性)」というコトバに引きずられて、誰しものがそうだと解釈してはいけない。では、「例外」ではないそうした人々、私たちが統計的分析を通して発見した「傾向」とは異なる動きをしている諸個人は一体どう解釈すればいいのか。

この最後の点は、「相対的剥奪」論の研究者を陰に陽にずっと悩まし続けてきた問題であるよう

2) ちなみに、憲兵隊全体、航空隊全体、全体(憲+航)についての計算結果も掲げておく。むろん「関連の度合い」を問題にするならば、「クラメールの連関係数V」などの統計量を求めることが意味あるけれども、ここでは「関連性の有無」のみを問題にしているため、その議論には立ち入らない。

	憲/全(a)	憲/全(b)	航/全(a)	航/全(b)	全体(a)	全体(b)
χ^2 値	18.448	29.958	7.478	16.809	12.642	30.645
p 値	0.000	0.000	0.006	0.000	0.000	0.000

3) P.ケンドールとP.F.ラザーズフェルドは、筆者のいう「個人的特性」にあたるものを「パーソナルデータ(を用いて分かる事柄)」、「集団的特性」にあたるものを「ユニットデータ(を用いて分かる事柄)」として夙に、次のようにいとも簡潔明瞭に指摘していた。「パーソナルデータを使えば、昇進は満足と正の関係をもっているが、ユニットデータを使えば、満足は昇進機会と負の関係をもっている」と。本稿が遠回りして述べてきたことも煎じつめれば、これに尽きる。

に私は感じている。否、もしかすると「相対的剥奪」論だけでなく、いろいろのトピックをめぐるいろいろの質的・量的アプローチにも陰に陽に蒸し返されている難題であるかもしれない。いわゆる「飛び値」や「風変わりな人（・社会・慣行）」をそもそもの分析対象から外してしまおうとする研究もあれば、そこにこそ顕著な例として殊更着目しようとする研究もある。「どちらのタイプの研究も必要だ」といった殊更和善的な発言も聞こえてきそうである。しかし、*The American Soldier* の CHART IX のようなデータについて限って言えば、個人的特性と集団的特性との真逆の関係を一貫したかたちで説明することが求められており、そこから「溢れる」事例についても一貫したかたちで説明しようとする努力を続ける必要があるだろう。そうした一貫したかたちで説明しようとする概念が、「相対的剥奪」概念であり「準拠集団」概念だったのだと思う。「結局のところ、個人は（一人ひとり顔が異なるように）バラバラだ」というのは、最後の台詞として遠い先に留め置いておかねばならない。

ろ、個人は（一人ひとり顔が異なるように）バラバラだ」というのは、最後の台詞として遠い先に留め置いておかねばならない。

参考文献

- Kendall, P. L. and P. F. Lazarsfeld, 1950. 'Problems of Survey Analysis,' pp. 186-196, in *Continuities in Social Research: Studies in the Scope and Method of "The American Soldier,"* edited by Robert K. Merton and Paul F. Lazarsfeld. The Free Press.
- 高坂健次、2009. 「相対的剥奪論 再訪（一）」関西学院大学社会学部研究会『関西学院大学 社会学部 紀要』第108号：121-132.
- 高坂健次、2010. 「相対的剥奪論 再訪（二）」関西学院大学社会学部研究会『関西学院大学 社会学部 紀要』第109号：137-147.
- Stouffer, S. A., E. A. Suchman, L. C. DeVinney, S. A. Star, and R. M. Williams. 1949. *The American Soldier, Volume I: Adjustment During Army Life.* Princeton University Press.

The Theory of Relative Deprivation Revisited (3)

ABSTRACT

The present paper is the continuation of earlier articles by the author on the same topic. The present paper stresses that a phenomenon addressed by the theory of relative deprivation that appears to be 'seemingly paradoxical' is paradoxical not against our intuitive notion, but against the empirical data shown about the individuals' opinions or attitudes. Using the expression of P. L. Kendall and P. F. Lazarsfeld (1950), 'the personal data shows a positive association between promotions and the system for approving promotions, while unit data shows a negative correlation between promotion chances and approval'. The theory of relative deprivation is significant and interesting because of this discrepancy between individual property and collective property. This research provides a visual representation of the data using a reconstructed graph to show the positive relationship between promotion and satisfaction, and the results of test of statistical independence between those two variables.

Key Words: relative deprivation, *The American Soldier*, individual property, collective property